血色の夢に酔って

「純君……もうすぐだね」

私は胸の高まりを強く感じた。

「はぁ、ふふふ」

これからのことを少し考えるだけでも笑みがこぼれる。どうせ幽霊の私なんて誰も見えなし、気にすることもない。

「はぁ、はぁ、純君……」

もう一度思い人の名を口にして私は目を閉じた。
まるで生きているように血が体中を駆け巡っているような感覚に襲われた。
冷ますことのできない疼きを感じながら、私は深い闇と一つになった。

＊

「着いたな」

新しい一人暮らしが始まるのに、日野純の顔には緊張も喜びも不安すらなかった。
この町も、家賃 9000 千円のこの平屋も純にとってはもう見知ったものだったからだ。

「表札買わないとな」

昨日同情に満ちた顔をした大家から渡されたカギを使って、家に入った。

「お邪魔……いやいや、ただいま」

「……おかえりなさい」

か細い、しかし確かな喜びを含んだ声が純には聞こえなかった。

「さて、荷ほどきしますか」

自分に言い聞かせるように声をあげ、小さなダンボールから順に開けていった。

＊

「うお、やわらけ、もうこのまま眠りたい」

５時間後、荷ほどきを終えて布団まで敷いた頃には窓の外は朱色に染まっていた。

「でもだめだ、よっと」

そういって立ち上がり、台所に向かうとヤカンを火にかけて、お湯を沸かし始めた。

「そういや枕がないな。あれって確かクッション代わりに思い出って書いたのに入れたと思うんだけど」

玄関、廊下、洗面所、居間、その横の寝室、最後にトイレまで家中見たけれど『思い出』と書いたダンボールはなかった。

「一体どこだ。後は寝室のクローゼットと押し入れ、なかったら業者に問い合わせないと」

ぶつぶつとつぶやきながら押し入れを開けると、ひらりと１枚の写真が落ちてきた。手に取って見ると、そこには幼い純、そして……頬を赤く染めたてるかが写っていた。

「なんだよ、これ」

頬を赤く染めたてるかが写っていたはずだった。けれどてるかのいたその位置には真っ黒いシミが点々と広がり、てるかを隠してしまっていた。
写真から押し入れに目を向けると、上の段に小さめのダンボールと今までの思い出、そしてずたずたになった枕が置かれていた。

カラカラ、カラ

下の段の奥から何かが転がってくる音がした。
確認しようにも体が鉛のように重く、動かせない。
そして、その何かを追う、何かを転がした張本人が……

ピーーーーキーーーーッ

多くの家庭ではもうめったに聞くことのないヤカンの音に反応して、ぱっと押し入れから離れた。

「いっけね、忘れてた」

わざとらしくそうつぶやくと、台所に向かった。沸き立ったお湯をカップめんに注ぎ、テーブルに座ってほっと一息ついた。

「あの枕、一体何があったんだ」

引き裂かれた枕を思い出し、純は得体のしれない寒気を感じた。

「そろそろいいかな」

カップめんのふたを開けると、温かい湯気と鶏がらの香りが広がり、先ほどの寒気も少しずつ消え失せていった。

＊

「ごちそうさま」

つつましい夕食を終えると、空はもう朱色から紫色に変わっていた。

「さて、荷ほどきも終えたし、あとは掃除だけだ」

そう言って気合を入れると、一気に掃除を始めた。１０時をまわった頃には押し入れを残してすべての掃除が終わってしまっていた。

「ふう、あとは押し入れに全てしまうだけか」

言葉にするとドクンっと心臓がはねた。

「そうだ、あれがあった」

純は鞄から少し古びたお守りを取り出し、ポケットに放り込んだ。

「気休めだけど、ないよりマシか」

おそるおそる押し入れを覗いてみると、引き裂かれた枕と思い出の入ったダンボールがそのまま残っていた。下の段にはひっくり返ったパトカーのミニカーが転がっていた。しかし、気味の悪さはすっかり消え失せていた。

「一体どうしてこうなったんだ」

枕を手に取ってまじまじと見つめた。

「手で引きちぎったのか。だとしたなかなかすごい奴だな」

少し感心したように声を上げた。人間じゃなかなかできることではない。

「今日は枕なしか寝違えなきゃいいけどな」

枕を捨て、思い出の品をなおした後、風呂に入ってさっさと布団に潜りこんだ。
ちなみにパジャマのポケットにはお守りを忍ばせていた。

＊

ピピピピピ……

聞きなれた電子音で目を覚ました。外はまだ薄暗く、布団の温かさが恋しい時間でもある。

「朝か……」

心地よいまどろみを楽しみたい気持ちだったが、残念ながら今日はテレビ等の残りの家電が届く日だったことを思い出し、のそのそと布団から這い出た。昨日と同じようにヤカンに火をかけ、今日の予定を考え始めた。

＊

ピンポーン。
太陽も高く昇ったころ。玄関のチャイムがなった。

「はーい、今出ます」

玄関を開けると、そこには一人の美人が立っていた。つやのある黒髪に、透き通る白い肌、しかし残念なことにこの美しい人は女ではなく男だった。そして何の運命のいたずらか俺の幼馴染だった。

「こんにちは、純君」

「何してるんだ、こんなところで」

「引越しの手伝いだよ。それにご飯作りに、どうせ昨日も今日もインスタントでしょう」

ずばりそのものなので反論ができない。

「まあ、とりあえず入って」

「はい、お邪魔します」

ニコリと笑ったその表情は純にとってなつかしい笑顔だった。

「ここが純君との愛の巣か」

「まるでここに暮らすみたいな言い方するな」

「寝室もこれくらい広ければダブルベッドも置けるね。でも、お布団の方が部屋の雰囲気に合うかな」

勝手なことをつぶやきながら家の中を見て回っている。まるで恋人のようのことを言いながら楽しそうに独り言をつぶやいている。

「お風呂も十分な広さだね。二人でもゆっくりくつろげるね」

「おいおい、二人で入るつもりもないし、そもそもなぁおぼろ、君と一緒に暮らすつもりもない」

「もう、照れちゃって。昔はよく一緒に入ったじゃない」

頬をほんのり赤く染めて、誘うような目つきでおぼろはこっちを見ている。

「はいはいテンプレセリフお疲れ様。単純にもうこの歳で男同士の風呂とか生理的に……」

「生理的に反応しちゃうから恥ずかしいのね」

「ちげーよ、男に生理的に反応するとか素直に嫌だよ」

おぼろはいきなりグイッと顔を近づけてきた。

「恥ずかしがらなくても、もう、わたしたち、お年ごろだもんね」

甘い音色を含んだ声で囁いてきた。おぼろは顔を真っ赤に染め、ふとももをもじもじと動かしている。

「いっいや、そんな問題じゃなくて」

純の声は裏返っていた。

「声、だらしなくなってるよ」

おぼろの言うことは図星だった。かわいい幼馴染の予期せぬ奇襲に少なからず動揺していた。うるうるとした目、ぷっくりとふくらみ、しっとりと濡れてキラキラしている唇に図らずとも目が釘付けになっていた。

「違うよ」

強引に目をそらしながら言った。

「目、泳いでいるよ」

そう言って、おぼろはさらに体をくっつけてきた。思わず下がったけれど、すぐに窓際についてしまった。二人の体はすでにぴったりとくっつき、おぼろはうるうるとした目で純を見上げている。

「おい、人に見られるぞ」

「それは人から見られない場所なら OK ってこと」

おぼろは純の腰に腕をからませ、キュッと抱き着いた。

「そんな意味じゃねーよ」

そうこう言っているうちに、ますますおぼろの顔は近づいていった。そしておぼろの甘い吐息が純の鼻先をくすぐる距離までになったとき……

ガシャーン

「何の音だ」

その音で正気に戻った純はおぼろから離れ、台所まで音の正体を確かめに行った。

「あら、あと少しだったのに」

おぼろは残念そうに言って、純の後についていった。
台所を見てみると、食器棚から落ちたコップの破片が散らばっていた。

「うわ、おぼろ破片が刺さると危ないから掃除が終わるまでそこで待ってろ」

「うん、それにしてもなんで落ちたんだろうね」

おぼろと同じ疑問を純も抱いていた。地震もないのに棚の奥にあるコップが落ちる理由はわからなかった。食器棚に近づき、破片を拾おう屈んだ時……

「裏切り者」

突然テーブルの下から伸びてきた白い手が純の足首をつかんでいた。

「うわあああああ」

あわてて白い手を振り払ったとき、純はバランスを崩した。

「いったあああああ」

そして、こけて手をついた時、右の手のひらに大きな破片が刺さり、真っ赤な血が次々と溢れてきた。

「純君大丈夫」

純の声に驚き、おぼろが駆け込んできた。

「きゃあ、大変」

＊

「これでいいかな」

包帯を巻き終わったおぼろは少し満足そうな顔をしていた。

「破片が危ないって言っておいて自分がケガしてどうするの」

「……そうだね」

さっきの白い手、それにあの声は……

「それにしてもそんな手じゃ生活に困るよね」

「……そうだね」

もしかしたら、てるかの……いやいや、あいつじゃあるまいし、幽霊なんか俺に見えるわけがない。

「こうなったら、わたしが純君のお世話をするしたないよね」

「……そうだねって、どうしてそうなるの？ 」

おぼろの言葉が純を現実に呼び戻した。

「だってその手じゃ日常生活送りにくいでしょう」

確かにそうだった。それに今日はテレビとか残りの家電が届く予定だった。

「それじゃお願いしようかな」

「任されました。それにしても純君、ちょっと言いにくいことがあるんだけど」

おぼろはうつむきながら言った。

「この家、何か……いるよ」

「そんなわけないだろう」

純はきっぱりと言い切った。

「いたとしても、おぼろに分かるわけないよ」

「そう」

おぼろは悲しげに頷いた。

「じゃあ、わたしお風呂掃除してくるね」

おぼろはそう言ってぱたぱたと走って行った。

「いたとしても、しのぶならきっとわかるだろう。でもおぼろ、君はしのぶじゃあない。どんなに女らしい格好しても、君は君の妹にはなれないよ。そして……」

本来なら本人に向かって言うべきことを、誰もいない部屋に向かって、もう死んだ恋人のことを、おぼろの妹のことを記憶の海から拾い上げていた。

「そうだ」

純は少し古びたお守りを取り出し、ぎゅっと握った。

「いっぱいがんばって作ったからどんな悪霊も近づけないって言ってたな」

しのぶの作ってくれた思い出のお守り……ずっと持っている恋人のくれた純の宝物だった。おぼろとしのぶの実家は神社だ。そのせいか、しのぶは信じがたいことに霊感が備わっていた。実際に確かめたことはないが、おぼろは妹の話を信じていた。霊感があるような発言も妹になりきる一環か……
そういえば、そのころからか、おぼろがおかしくなったのも……しのぶが死んでからしばらくして会ってみると、おぼろがしのぶになっていた。そのころにしのぶが死んだってきちんと説得していれば今みたいに人生踏み外すこともなかったかもしれない。

「いかんな、今更どうこう言っても」

純は立ち上がって座布団を枕にして昼寝をすることにした。

＊

気が付くと古びた映画館にいた。目の前の大きなスクリーンにモノクロの映像が乱れた画質、そして、大きなノイズと共に流れていた。

「ザッ……ザ……そくだよ」

ノイズの中からなつかしい声が混じって聞こえてきた。

「将来……んは……あたしの……の」

記憶の水底に沈めていた記憶がよみがえってくる。

「そしてね……」

一際大きなノイズに包まれながら、俺の意識は白く染まった。

＊

今俺の戦うべき現実を認識しよう。目の前にいる、俺の顔を覗き込んでいる可愛い幼馴染（男）をどう張り倒すかだ。

「おはよう、純君」

にっこりと悪びれた様子をみじんも感じさせず、それどころかさらに顔を寄せてくる。
その顔に、俺は迷うことなく頭突きを食らわせた。

「コブラッ」

おぼろは世にも奇妙な悲鳴をあげた。

「女の子になんて声あげはせるのよ」

おぼろは濁った声で講義をしてきた。

「それはこっちのセリフだ。俺になにをするつもりだった」

「王子様には、お姫様のキス」

「俺らは男同士だ」

「そうだね、わたしは姫じゃなく、巫女だった」

そういうことではないけど、もうめんどいし、いいや。

「ねえ、純君、もう夜だけど、ご飯にする？　お風呂に……」

「いい匂いがするな。まず飯にしよう」

そう言って立ち上がると、おぼろが不満そうに講義をしてきた。

「もう、早すぎると、嫌われるぞ。日常でも、夜でも……」

「カレーか、早速いただきます」

おぼろを無視してカレーを食べ始めた。

「全く、そんなそっけない態度じゃ今後の夫婦生活が不安だよ」

ぶつぶつ文句を言いながらも、おぼろは食卓に着いた。

＊

「ごちそうさま」

「おそまつ様です」

途中あ〜んされたりしたが、それら全てをスルーしてつつがなく夕食を終えた。

「つれない旦那様、そう態度が夫婦生活の破局の第一歩なのに」

「誰が旦那様だ」

「純君がウエディングドレス着るの？　」

「そんなわけんねーよ」

「もう、純君。夜中にそんな大声出さないの」

メッと幼子の叱るようにおぼろが言った。

「はあ」

純はやり場のない思いをため息とともに吐き出した。

「風呂に入る。一緒に入らないぞ」

「うっ旦那様の指す釘が痛い」

先制攻撃を撃たれ、ほぞをかんでいるおぼろをしり目に、純は風呂場に向かった。

「はぁーー」

怪我した右手に気を付けながら、湯船に浸かった。

「あの白い手」

俺の足首をつかんだあの手を思い出していた。

「あの手、小さかったな」

ひょっとしたら、てるかの手かもしれない、そんな思いが頭をよぎったが、すぐにその考えを捨てた。死んだやつが幽霊になったわけないし、それに第一幽霊なんか……でもあの手、幻覚なんかじゃなかった、そして、振り払ったっていうより、何かに痛がって自分から手を放したって感じがした。
そこまで考えた時に、引っ越してきたからの記憶が蘇ってきた。

「もしかして、本当に」

純の思考は負のスパイラルを描いていた。

「てるかが幽霊になって？ 」

昔、この家に住んでいた、てるかの、幼馴染の家が格安で借りれた。ただそれだけだった。
ホラーによくある幽霊憑き物件なんて展開あるわけないと思っていた。
ただ、もし本当にてるかが幽霊になって、もし初恋の女の子に会えたら……

「お背中お流しします」

予期せぬ乱入者の登場に純の思考は引き裂かれた。

「目標を視認、迎撃態勢に移行する」

純はシャワーをおぼろに向け、思いっきり蛇口をひねった。

「純君、冷たいよ」

「わかっとるわ、そんなこと。早く出てけ」

「クスン」

おぼろは黙って退散した。

「ふっ悪霊退散」

純は無意味にかっこつけていた。

＊

風呂上り、純はトイレに立てこもり考える人になっていた。ここなら奇襲を受ける心配が少ないからだ。

「てるかに会ってどうするつもりだったんだ」

初恋、そして

「両想い、だったのか」

純の中で風化していた感情が次々と瑞々しく思い出された。てるかと過ごした日々、その断片が次々と純の中に浮かんでは消えた。

「やっぱり、好きだったなぁ。てるかのこと」

暖かい気持ちと同時に暗い気持ちにも純は襲われた。

「あの時」

てるかが死んだのは別に特別な理由はない。ただの交通事故だ。父の仕事の都合上引っ越すことが決まった俺に小さなビーズ指輪を持ってきたんだ。

「……婚約指輪」

地面を見ながら指輪を渡してくれたてるかの顔が目に浮かんできた。

「てるかが死んで、落ち込んだ暗い転校生に声かけてくれた」
山神しのぶ、亡き恋人。

「なにもこの歳で二人の好きな人と永遠に会えないって、悲恋物のドラマ、しかも C 級もの確定だな」

そういうと、純は自嘲気味に笑いを浮かべた。
コンコンコン
控えめなノック音がトイレの中に響いた。

「純君、洋式トイレに長く座ると痔になるよ」

またもおぼろの仕業で純の思考は停止を余儀なくされた。

「それに、この家、やっぱり何かいるし」

少し怯えた様子でおぼろは言った。

「わたしのお守りちゃんと持ってる」

「あれは、しのぶがつくったものだ」

純はきっぱりと言った。

「それにお前、今日は少々ウザすぎるぞ」

イラつきを隠すことなくストレートにおぼろにぶつけた。

「そうだよね、邪魔だよね」

ひやりとした感覚と共にそんな声が純の耳元で確かに聞こえた。あわててトイレ全体を見渡しても、声の主は見つからなかった。

「今のって……」

「純君は今でも……」

背後に声の主がいる。でも、近づく様子はないみたいだ。ひょっとしてこれがお守りの力か。それなら……
ガチャリ
純は冷静にドアを開けたつもりだったが、いざ開けてみると緊張から解放され、そのままおぼろを押し倒す形で倒れてしまった。

「純君、トイレでなにしてたの？ 」

当然の疑問をおぼろがぶつけてきた。

「いや、たいしてなにも」

まだ少し純の声はふるえていた。

「純君声が震えるほど我慢してたの？ 」

おぼろの顔は押し倒された驚きと照れによって真っ赤に染まっていた。

「でもでもでも、こんなムードのないのって、いやいやいや嬉しいけど、でも、そのちょっと待ってくれればお布団くらいしけるし」

おぼろは純の下でひとり暴走していた。

「うん、せっかく純君が本気になったしここは……」

「おいおいおいおい、待って待って待って。ひとりでそんな勝手な決着と覚悟決めないで」

純はバチンとおぼろの頬を叩き、落ち着かせようとした。

「ふえ」

おぼろは目をバッテンにして間の抜けた声を上げた。
そして純はあわてておぼろの上から飛びのいた。

「とっとにかく、変な誤解はするな。俺はもう歯を磨いて寝る」

そういうと、純は洗面所に行った。

「うう、ひどいなぁ」

恨めしそうなつぶやきと共におぼろも洗面所に向かった。
キィーーー、バタン
開けられたトイレのドアが独りでに閉じた後、玄関を静寂と闇が支配した。

＊

「えへへ、純君と同じお布団だ」

純とおぼろは狭い布団に二人して入っていた。

「いいから黙って目をつぶれ」

「でも、こんなにしっかり手も握られてちゃ、嬉しくてなかなか寝付けないよ」

純はおぼろの手をしっかりと握っていた。これは寝ている間に体をまさぐられないためでもあるが、なにより……

『そうだよね、邪魔だよね』

あの声が気になるからだった。いかに変わったといってもおぼろは大切な友達であり、危険なことにあう可能性はできる限り避けたかった。

「羊でも数えろ」

そう言って、純は握ってない方の手をポケットに突っ込み、しのぶのお守りをギュっとつかんだ。

「今どき羊はないよ」

「じゃあ、オリジナルで考えろ」

「はーい、う〜ん」

おぼろは目を強くつぶって考え始めた。

「白をツモって、白をツモって、白をツモって、大三元」

「そんなにうまくいくか」

思わずつっこんでしまった。

「う〜ん、じゃあ、白をツモって、白をツモって、白をツモって、ツモあがり、白、ツモのみの……」

「違う、現実的にすればいいってことじゃあないんだ」

純は思わずまたつっこんでいた。

「じゃあじゃあ、純君のパンチラが１回、純君の胸チラが１回、純……」

「やめて、明日からおぼろの視線が怖くなる」

涙の混じった声で純は抗議した。

「だったら、再生数が 100 越え、再生数が 1000 越え、再生数が 10000 越え、そして、いつかはミリオン、さらにダブル……」

「なにしてるんだお前は」

「踊ってみた（タグ）」

「急いで削除しなさい」

「そんな、違反はしてないよ」

「そんなことはどうでもいい」

「そのような運営の措置に、一ユーザーとして大変遺憾の意を抱いております」

「政治家答弁しない」

「一ユーザーとして、大変士官の意を抱いております」

「どこに所属するつもりだ」

「皇国歌劇団」

「やめろ、なんか危険な香りがする」

純はゼイゼイと肩で息をしている。

「お布団の中でそんなにハアハアされると」

「だれのせいでこうなった」

「わたしの体、そんなに、そんなに……ややるの？ 」

「判決、黙って寝ろ」

そう言って無理やりおぼろを黙らせた。

＊

サァー
押し入れの開く音で、純の目が覚めた。
カサ、カサ、ペタ
純は一層強く目をつぶって、布団を深くかぶった。
カサ、ズッ、ズッ
誰かが布団の側に屈み、布団を軽くひっぱている。
カタ、ペタ、ペタ
誰かは立ち上がった後、寝室を出て台所の方に行った。
ジャー、シャッ、シャッ
台所の方から水の音と包丁を研ぐ鋭い音がこだましてきた。

「フフフ」

聞こえてくる笑い声を必死に無視して、眠ろうと無駄な努力を朝まで続けることになった。

＊

「今日の純君、なんか元気ない」

朝の食卓でおぼろは純にそう言った。

「昨日お前が騒いだせいだ」

眠気をこらえながらそう言った。

「……本当にそれだけ？ 」

「ああ、そうだ」

純は嘘をついた。
トゥルルル、トゥルルル
朝早くからの電話に純は少し不機嫌そうに出た。

「はい、日野です。はい、はい、わかりました。今日中に伺います」

事務的な受け答えをした後、純は電話を切った。

「おぼろ、今日ちょっと不動産屋まで行く」

「うん。でもどうして」

「何でもちょっとした書類不備らしい」

「大丈夫なの、それ」

「行ってみればわかる。ごちそうさま」

そういうと純は出かける支度を始めた。

＊

「すいません、今朝電話があった日野です」

不動産屋の中は中年の店主、確か島野とかいう人一人だった。

「ああ、いらっしゃい。それでどんな部屋をお探しで？ 」

「いや、部屋じゃなく今朝電話があった日野です」

「ん、うちから今朝電話したところなんてないよ。どこかと間違えているんだろう」

店主は不思議そうな顔をしていた。

「いや、僕が部屋を借りたのは確かにここです。ほら、あの格安の平屋の家です」

「あの家を借りたひとか」

店主の顔に隠しきれない困惑が浮かんだ。

「君も住む前からわかっていただろう。なんで安いか」

「はぁ」

ぶつぶつとつぶやく店主に気の抜けた相づちをうった。

「君の家に電話があったが、かけてきた相手は私じゃない。つまり……そういうことだ」

そこまで言われた時、やっと眠っていた純の脳が覚せいした。そうして一目散にかけ出した。家にいるおぼろの無事を祈りながら。

＊

汗まみれになって純は家の前についた。帰る途中何度も自分の浅はかさを呪った。入る前

にポケットのお守りを手に握りしめた。
「ただいま……」

ジャーーー
意を決して玄関を開けた純を最初に出迎えたのは昨夜も聞いた水の音だった。

「おぼろ、いないのか」

台所まで進んだとき、純は真っ白になった。
おぼろはいた。包丁を背中からはやし、黒い海の中に倒れていた。

「おぼろ」

か細い声以外純からでるものはなかった。

「改めて、おかえり純君」

後から声がした。ゆっくり振り返ると、そこにはてるかがいた。死んだときと変わらない姿のてるかが包丁を手に立っていた。包丁にはまだ乾いていない血が滴っている。

「てるか、君が殺したのか」

てるかはにっこりと笑った。

「これで邪魔はないね」

てるかはうれしそうに笑っていた。

「純は大きくなったね。ねえ、あたしをだっこして」

てるかは両腕を広げておねだりしてきた。

「ああ、いいよ」

力ない声でそういうと、純はてるかの背中に腕をまわした。そして、手に握ったしのぶのお守りを、思いっきり、てるかの心臓部分に突き刺した。

「うおわぁぁぁ」

野太い、おぞましい悲鳴をあげて、てるかの姿は四散した。てるかの立っていたところに二つに裂けたお守りが残っている。

「はぁ……」

重苦しいため息をついた後、純はおぼろのところに向かった。血だまりの中に屈んで、おぼろに対してつぶやき始めた。

「ごめんな、こんなことになって」

すると、おぼろの口がわずかに動き始めた。せめて、遺言くらい聞こうと、純は耳を口元に寄せた。

「に……げ……ろ」

その遺言を純が実行する前に、純の背中にてるかの持っていた包丁が突き立てられた。
薄れゆく意識の中、純の生きているうち最後に見た光景は、愛する死んだ恋人だった。

＊

私は今、取り戻した幸せをかみしめていた。

「久しぶり、純君」

背中からどくどくと、湧水の様に血を溢れさせている純に、しのぶは嬉しそうに声をかけた。

「これで、恋人同士幸せな生活が送れるね」

純のそばに行き、しのぶは語りかけ続けた。

「本当はもっと早く、一緒に暮らしたかったけど、私のお守りのせいで私自身が近寄れなくって、うう、身から出た錆ってこういうことだよね」

純は答えない、ただピクピクと四肢を震わせるだけだった。

「あとねぇ、純君。私はちょっと怒っているの」

そういうと、しのぶは純に刺さったままの包丁を抜いた。

「頭いかれたくそ兄貴の汗臭そうな誘惑に揺らいでいるし、引っ越す前にままごとみたいな乳臭い遊びの恋しかしたことない女に目を向けるし」

そう言いながら、ザクザクと純を刺した。

「だから、これはお仕置きなの。もう、二度と、私から目を離さないようにするためにね」

そういって、一際強く刺しこんだ。

「だからね、これからちゃんと、私をね、刻んであげる。もう、よそ見しない様にね」

ああ、やっときた。これから私と純君とのすてきな日々が始まるんだ。
しのぶの夢はどこまでも、どこまでも、際限なく広がっていった。

＊

不動産屋の店主、島野は幸せだった。

「またまた、取材か。へへへ」

いわくつき物件の平屋に取材が入るようになったからだ。

「もうどうしようもないと思ったけど、何とかなるものだね」

あの平屋からの収入は島野の予想以上だった。心霊物件 1 日お泊りコースっというものもその道のマニアに好評だった。

「今月も予約が 8 件、なかなかだな」

上機嫌の島野は背後の恐怖に気が付かなかった。

「ほへぇ」

彼の最後の言葉は何とも間の抜けたものだった。
それもそのはず、声を出すための口はすでに血で溢れていた。

「私と純君の暮らしを、幸せを、邪魔するなぁあああ」

そして、島野が最後に聞いたものは夢に酔う少女の絶叫だった。

Fin